



日本美術における「プリミティヴ」なものへの志向 ： 第二次世界大戦を分水嶺とする言説の展開

著者	篠原 華子
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9343号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160892

氏 名	篠原 華子
学 位 の 種 類	博士（ 学 術 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 9 3 4 3 号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本美術における「プリミティヴ」なものへの志向 ——第二次世界大戦を分水嶺とする言説の展開

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	山口恵里子
副 査	筑波大学 准教授	博士（社会学）	江藤 光紀
副 査	筑波大学 准教授	博士（文学）	清水 知子
副 査	京都橘大学 教 授	博士（文学）	大久保恭子

論 文 の 要 旨

本論文は、1910年代から1960年代までの日本美術において「プリミティヴ」なものへの志向が言説や芸術作品にいかなる表現で表出されたのかを追跡し、20世紀西洋美術におけるプリミティヴィズムの影響を受けつつ、「プリミティヴ」なものへの日本独自の反応が生じた過程とその変容のありようを解き明かすことを目的とする。西洋美術におけるプリミティヴィズムは、非ヨーロッパの「プリミティヴ」な社会や文化の造形物からインスピレーションを得て展開された20世紀初頭の芸術の動向である。しかし、その内容は発祥地であるパリとその流れを受けたニューヨークでは異なっている。プリミティヴィズムとはプリミティヴなものへの反応としての「芸術を生み出す一つの態度」（ゴールドウォーター）であり、そこにはまなざす側の社会的・歴史的・文化的背景が自ずと反映されるからである。こうした視座に立脚し、本論文は、西洋から「プリミティヴ」な文化・地域として位置づけられてきた「日本」の美術が、いかに「プリミティヴ」なものへと反応したのかという斬新な問いかけに挑んだ。著者は、美術家、批評家、蒐集家、博物館・美術館の関係者らが「プリミティヴ」なものを論じた言説に着目し、その言説が第二次世界大戦を分水嶺として変容し、それに伴い「プリミティヴ」なものが指示する方向性が変化したことを明らかにした。

本論文は、2部全7章から構成される。第1部（第1～3章）は1910年代から1945年までの日本におけるプリミティヴィズム受容を美術批評、出版物、個人の蒐集活動から考察した。第1章は、西洋美術の需要と普及に重要な役割を果たした美術雑誌『白樺』が、プリミティヴィズムの受容に与えた影響を論じた。『白樺』の同人は、イギリスの美術評論家ロジャー・フライがプリミティヴ・アートとモダニズムとの関連に着目してロンドンで開催した展覧会「マネとポスト印象派の画家たち」（1910）に関心を寄せたが、彼らはフライがポスト印象派に期待したモダニズムの展開よりも、作家の人生を重視する人格主義に傾倒した。この思想は、近代からの逃避や西洋的な美的価値からの自立を促した。『白樺』の影響を受けた土方久功は「南洋

群島」に渡航後、西欧型プリミティヴィズムを批判し、民族誌の調査を実施しながら、生活に根ざした独自のプリミティブな表現を木彫作品等に試みた。それは、近代の進歩主義やアカデミズムを信奉する「玄人」と対比される「素人」、すなわち内的な衝動から制作に向かい「絶対的な自由」をもつ作家として生み出した表現だった。第2章は、既存の美とは異なる美を見出そうとする意欲が「原始美術」ないしは「民族芸術」に関する出版物や、岸本五兵衛と宮武辰夫の蒐集の動機となったことを明らかにした。出版物としては、洪洋社の「土人藝術叢書」(1925-27)と『世界美術全集別巻』第15巻「民族藝術篇」(1930)に焦点を当て、日本の読者における「原始芸術」への関心の芽生えを指摘した。こうした関心は、海運業を営んでいた岸本や「原始芸術」を追究した宮武の研究と蒐集活動とも呼応する。本論文は、岸本が蒐集した土俗の品を「民芸」と称し、宮武も原始芸術論で「民芸」という語を用いたことに注目する。第3章では、その美を見出した柳宗悦の民芸論が論じられる。本論文は、柳が、「美術」の外側に置かれた工芸の美に西洋的な美とは異なる美を見出したところに、西洋美術が「プリミティブ」な造形物の影響下で新たな美を追求したプリミティヴィズムとの類似点をみる。柳は、1936年に日本民藝館を開設、民芸を展示して美の価値転換を訴え、さらにはアイヌ文化を研究して「原始工芸」を提唱、工芸と生活、そして土着の宗教との結びつきを論じた。

第2部(第4〜7章)は、第二次世界大戦後、日本美術の方向性が模索されるなかで議論されたプリミティヴィズムを考察対象とする。敗戦を経験した日本では、「原始」から日本美術を見直す動きが生じる一方で、西洋美術の再受容が期待され、西洋のモダニズムとの関連から日本美術の在り方を探求する動きもみられた。第4章は、後者の動きのなかで開催された「ピカソ展」(1951)の関連記事を精査するとともに、フランスのモダニズムを紹介した岡本太郎や滝口修造の著作を考察した。これらで、西洋美術史におけるプリミティヴィズムとモダニズムの関連が議論され、その要としてのピカソに注目が集まった。戦後の日本人美術家にとって、日本人としてのアイデンティティを保持しながら国際的に通用する作品を制作するという課題を克服するうえで西洋のプリミティヴィズムとピカソ芸術がきわめて示唆的だったからである。そうした状況下で、木村重信は、過去の「原始人」による「原始美術」と現在の「未開人」による「未開美術」とを区別する必要性を説いた。アカデミックな言説のなかで「プリミティブ」なるものが論じられるようになったのである。第5章はイサム・ノグチ、第6章は岡本太郎の芸術を論じる。ニューヨークで活動していたイサム・ノグチは、アメリカのプリミティヴィズムと「弥生的なもの」への探究を接続し、モダンアートを日本的なるものに変換した。その変換を具現するのは、ノグチが1950年からの日本滞在中に制作した「土」を用いた陶芸作品である。幼少期を日本で過ごしたノグチは、「土」や弥生の造形に見出した「プリミティブ」なものを通して、日本古代の記憶と自らの遠い記憶を重ねつつ自身の根源を探求したのだが、弥生的なものを一つの参照枠においたプリミティブなものへの彼の志向は、日本美術の「原始」を追求するプリミティヴィズムを触発した。他方、1930年代にフランスのモダニズムや民族学に直接ふれた岡本太郎は、ヨーロッパのモダニズムと「プリミティブ・アート」を紹介した後、「四次元との対話——縄文土器論」(1952)を執筆、縄文土器を初めて日本美術史の文脈において捉え直すとともに、「プリミティブ」なものがもつ力を訴えた。その力のもとで芸術家は作品を制作し、鑑賞者は作品を見る。そして、すべての人が変化や行動を「創る人」となり、社会にアクションを起こす。このようなアクションを促す不可視な力との対話から導かれる「原始」の芸術形態を、岡本は「プリミティブ」なものを志向するなかで探った。第7章は、1960年代の日本美術界における「原始美術」理解の広がりや、国立近代美術館で開催された「現代の眼——原始美術から」展(1960)を一つの事例として検証する。この展覧会以降、非西洋の「プリミティブ・アート」再評価の動きが顕著になり、その動きは作家の創作活動にも影響を与えた。例えば、美術家の山口勝弘は「原始美術」から芸術を再考し、『不定形美術ろん』(1967)を執筆した。また、美術批評家の日向あき子は、科学技術が発達した現在を未来の「原始」と捉え、現代生活の「原始性」に人類学的視点から眼差しを

向けることを訴えた。本論文は、プリミティヴィズムを「プリミティヴ」な対象との間に生じる関係性によって多様化する反応と定義し、その反応の変容を追跡してきたが、その意味で日向の論考を最後に取り上げたことは意味深い。日向がいう原始の現代においては、「プリミティヴ」なものとの距離はもはや問題ではなく、「プリミティヴ」なものと共存する新しい関係性が生じているからである。

以上のように、日本におけるプリミティヴィズムは、戦前から戦後へと時代が激変するなかで、美術の「外側」から西洋的な「美術」ないしは「美」の枠組みの再考を要請して非西洋の「原始美術」を蒐集・研究したことから、西洋のモダニズムに直面した日本の美術界で日本の「プリミティヴ」なものを探究する方向へと転換した。この転換により、「プリミティヴィズム」への志向が内面化したと言える。「プリミティヴ」なものとの対峙は、すなわち「近代」とは何かという切迫した問いでもあった。日本人は 20 世紀を通してその問いを「美」の境界を更新しながら発し続けてきたのである。

審 査 の 要 旨

1 批評

20 世紀美術におけるプリミティヴィズムは主として西洋美術の文脈で論じられてきたが、本論文は、日本を、西洋、「プリミティヴ」とみなされた地域とは別の第三極として位置づけ、その位置から発信された「プリミティヴ」なものをめぐる言説が、第二次世界大戦を分水嶺として転換するありようを明らかにした画期的かつ意欲的な研究である。著者は、雑誌・新聞記事、美術批評、展覧会図録、著作等の膨大な資料から「プリミティヴ」なものへの志向に関する言説を発掘して分析し、その言説を当時の政治社会的な諸動向とも関係づけ、さらに芸術作品とも照合しながら詳細に論じ、言説を通して見えてくる、戦前・戦後の日本美術のダイナミックな動きを追跡した。

質疑応答では以下の点が議論された。第二次世界大戦を日本のプリミティヴィズムに関わる言説の転換点として捉えたことにより、言説の動向が明示されたが、一方で「新しい日本」の創生の影に隠された問題もある。敗戦を経て日本人の民族的アイデンティティや文化観・歴史観・国家観・政治観は大きな転換を迎えるが、それに伴い「プリミティヴ」なものに対する態度も変化している。しかしそこには断絶のみならず継続している部分も当然だろう。そうした変化や継続の仕方も、問題として提起されなければならない。各言説が日本美術界・思想界においてどのような立場から発信されたのかをより明確にマッピングすることにより、それぞれの言説に反映された社会的変化や言説が生み出されたネットワークの存在も浮かび上がる。これらの指摘はいずれも本論文にとって重要な課題である。しかしながら、西洋発のプリミティヴィズムを日本から再考し、これまでの研究の見直しを迫った本論文の意義は強調してもしすぎることはない。日本美術における「プリミティヴ」なものへの志向の言説研究を、日本美術史、民族芸術研究、展覧会史、さらにはプリミティヴィズム研究にも位置付けた本論文の研究成果を高く評価したい。

2 最終試験

令和 2 年 1 月 20 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。